

《最後の同和問題学習》

【資料】

峠

『 生きるということ
愛すること
相手のいのちを尊ぶこと
私たち2人は 永遠に
真実を正視し
すべての人間を尊敬し
すべての人間を信頼し
美しさを求めて 生きていこうと誓いました
私たち 結婚します 』

幸司と恵子は、やっとできあがった招待状の原稿を感慨深くながめた。この招待状が生まれるまでには、2人で乗り越えなければならなかった多くの峠があったのだ。

2人が教職について3年が経過した春であった。

「恵子、もう結婚を考えていい年頃よ。だれかいい人がいるの。」

「お母さん、実は私……。」

大学時代から交際を続けていた幸司のことを思い切って打ち明けた。

その翌日の夕食後、母は険しい表情で恵子に言った。

「あなたがお付き合いしている小野幸司という人、同和地区の人だということ知ってるの。」

「えっ……。」

恵子の心が一瞬曇った。

「いくらあなたが結婚しようと思っても、認めるわけにはいかないの。」

「お母さんは、他人を差別するような人ではないと信じていたのに……。」

「人は遠くのことに對しては美しく生きられる。でも世間はそんなにあまくはない。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の結婚に大きな障害となってくる。見合いの話なんかは全くなくなるの。」

「それが世の中よ。みんなは自分に関わりのないところでは、差別をなくそうということは言えても、いざ自分自身の問題になるとそうはいかないの。」

いつもは口数の少ない父も、

「恵子のつらい気持ちはわかる。でもなあ、お母さんが言うように、恵子にも、私たちにも、妹の幸せを奪う権利はない。それだけじゃない。いとこたちまで、これからの結婚で肩身の狭い思いをしていくんだ。それが部落差別なんだ。」

恵子は返す言葉がなかった。

恵子には大学時代に友人から聞かされた言葉がよみがえってきた。

「小野君のこと知っているの。彼って、部落（被差別部落）の人よ。」

「付き合うの、やめたほうがいいと思うよ。」

「……………」

そんな恵子の一番の支えになったのは妹の励ましであった。

「お姉ちゃん、絶対に負けないで。私もお姉ちゃんのように世間に惑わされない生き方をしたいと思っている。お姉ちゃんが本当の幸せをつかもうとしているように、私もがんばっていくから……………」

心から応援してくれる妹の言葉がたまらなくうれしかった。しかし、恵子にはただ一つだけ気になることがあった。

数日後、恵子は幸司に思い切って話した。

「幸司は、私を信頼していない。どうして……………」

恵子の眼に涙が溢れた。

幸司にはその言葉の意味がすぐにわかった。幸司の心の中には、どうして自分から部落出身であることを語らなければならないのかというこだわりがあったからだ。

このとき、婚約までしていた相手との結婚が部落差別によって破れ、自らの生命を絶った幼なじみの姿が浮かんできた。絶望の中で生きる気力を失っていった悲しみが、自分のこととしてわかるのだった。恵子のすがるようなまなざしが幸司にはつらかった。しばらく沈黙が続いた後、幸司は静かに語り出した。

「部落のことだろう。高校の頃、ふるさとを離れることばかり考えたこともあった。その頃は、ぼくにとって部落は重かった。でも今は違う。人間として、この問題と向き合って生きていきたいと思っている。今はその思いでいっぱいだ。人生には、乗り越えなければならない峠がいくつもある。2人で共に幸せを求めて生きていこう。」

恵子は幸司の言葉にうなずいた。

「両親は、私たちの結婚に反対しているの。でもあなたとだったら説得できると思う。」

このときから大きな峠を越える2人の歩みが始まった。

「あなたのことは娘から聞いています。あなたはきっといい人でしょう。でも、世間にはまだまだ部落差別があります。親として娘を苦勞の淵に落とし込むことはできないんです。」

初めて幸司が恵子の家にあいさつに行ったとき、母親から返ってきた言葉である。幸司はこみ上げてくる怒りや悲しみを押さえ、言葉をかみしめて言った。

「世間には差別があると言われますけど、その世間をつくっているのは、私たち一人一人ではないのでしょうか。お母さんは世間という実体のないものを隠れ蓑にして、私たち部落の人間を差別しているんだと思います。」

「どんなに言われても、親として不幸の中に飛び込んでいく娘を放っておくことはできません。これ以上娘をあなたの思いに引っ張りこんで惑わさないでください。」

母親は感情的になって語気を強めた。幸司は必死に耐えていた。部落に生まれたことがそんなに悪いことなのか。おれがどんな悪いことをしたというんだ。腹の底からつき上げてくる怒りを思い切りぶつけて、早々にその場を立ち去りたかった。

しかし、その後も2人は必ずわかってもらえると、両親を信じて話し合いを続けた。母がいくら感情的になっても恵子は冷静であった。幸司も両親から訪問をこぼまれるときもあったが、恵子との愛を貫くために、繰り返し恵子の家に足を運んだ。

幸司は人間の生命まで奪ってしまう部落差別への怒りを込めて、かつて、部落という『かげ』におびえた自分自身を語り続けた。その思いに触れて当初かたくなであった両親も、段々とその本心を語ってくれるようになった。両親の悩みや苦しみは幸司たちにも理解できた。

人間は世間体というものにこだわり、知らず知らずのうちにお互いを傷つけてしまう、そんな弱さを持って生きている。そういう生き方ではなく、人間としてその間違いを正していく生き方がしたい。両親との話し合いの中で2人がつかんだ思いであった。

やがて両親は幸司が帰った後も、お互いの胸のうちを恵子に話すようになってきた。

「差別される痛みがわかっているから、差別しない生き方をしようとしているんでしょうね。」
「人の痛みがわかるからこそ本当に優しくなれるし、悩みながらもがんばっているんだろうね。」
「人間、あんな生き方ができたら本当に幸せでしょうね。」

恵子には部落差別が両親を苦しめていることが手に取るようにわかった。だからこそ、2人の思いをわかってもらいたかった。

やがて、両親は家族だんらんの中で次のような思いを語り合うようになった。

「結婚に反対することを恵子の幸せのためと言ってきたけど、結局は私たちが差別されないかと恐れて、恵子を苦しめてきたのではないかしら。」

「そのことで私たちも苦しんでいたと思う。恵子の思いを大切にすることが、親として当然のことだと思うようになったよ。」

「私たちが自分の『かげ』におびえていたんだわ。」

「私たちが自分の『かげ』をなくすことが、恵子を幸せにしていくことにつながるんだね。」

恵子は信じることの喜びや幸せ、人は変われるということをしみじみと実感した。

1年が経過し桜が満開になった春の日、恵子が両親に言った。

「結婚は、みんなに祝福されてほしい。お父さんやお母さんにも、幸司さんのご両親にも、心の底から喜んでもらえる結婚にしたいの。」

「そうね。自分の子どもの幸せを考えるなら、他人の子どもの幸せを考えなくてはね。幸司さんの幸せは恵子の幸せなのね。」

「人を差別することは、自分自身も苦しめていく。差別は損の分け取りなんだね。」

母親のあとに父親がつぶやくように言った。恵子はたまらなくうれしかった。大きな峠を越えたと思った。

翌日訪れた幸司に母親は語った。

「部落の人たちはかわいそうな人たちだと思っていました。でもあなたは人間としての誇りを持って生きています。そんなあなたを娘も尊敬しています。」

父親も身をのり出しながら力を込めて語った。

「私も、部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち2人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物のかついで生きていこうと話合ったんです。」

2人でともし続けてきた小さな灯が大きな炎となって燃え広がっていく。

(森口 健司)

【授業記録】主題「人生の大いなる峠を越えて」～義務教育・最後の同和問題学習として～

資料「峠」（森口 健司）

1994年3月4日（金）第5校時

3年A組 授業者 森口 健司

T₁：今日が最後の道徳の授業になります。来週の金曜日は高校入試で、その4日後にみんなは卒業です。この1年間みんなと取り組んできた同和問題学習の締め括りとして、どうしてもみんなとこの『峠』という作品を学習したいと思っていました。まだこの資料は文部省で検討をしているところですが、この資料の底に込められた願いをみんなに語り合っほしいと思って、最後の道徳の授業にこの資料を選びました。多分今日が、こういう形の授業は最後になると思います。この資料っていうのは、私自身のことがたくさん入っています。文部省の会議に毎月出張してきましたけど、その中で当初は同和問題の資料には抵抗があったんです。でも、この資料を書き上げて一緒に全国にこういう資料を出しましょうという先生方が文部省の会議の中でも増えてきたんです。多くの人の理解が得られて、この資料も今まとまっいてこうしています。この資料の様々な場面と私の生き方が重なるし、私の大切な仲間の声が聞こえてくる作品です。特に恵子には格別の思いがあります。恵子の生き方は、私の妻の生き方と大きく重なります。私の妻は小学校の先生をしているんですけど、こんなことがありました。あるときこんな話を私にしました。「お父さん、私を部落の人間と知らんで、部落の悪口をあれだけ言えるなって思うんよ」と小学校の先生が集まっている会合で出た話について言うんです。私は思わず言葉を返しました。「お前、いつから部落の人間になったんや。」って、そうしたら妻はこう言いました。「お父さん、愛子（長女）も佐紀（二女）も、部落の子になるんだらう。だから、私は立派な部落の人間よ。」と言いました。その言葉が本当にうれしかったんです。同和問題は一つ峠を越えたら何でもなくなっていく、こだわっていた自分の愚かさが見えてくるし、本当の幸福が見えてきます。この資料は、多くの学校で部落問題を自分の生活に重ねて学習してほしいという願いを込めてまとめていきました。この資料が主体的な同和問題の学習をつくり上げていく資料として、一人歩きしていくことを願ってこの資料を書きました。今、いろんな形で手直しがあります。全国のどここの中学校でも意欲的に差別問題を自分の生き方と重ねて学習していくことができる状況をつくっていききたい。そんな願いを込めて今この作品を見つめています。この資料がどこの学校においてもできる。そして、すべての中学生が、すべての人たちが、差別を憎み、差別を自分自身の問題として、部落に生まれた、部落に生まれなかったという世界を越えて、みんなが自分自身の問題として考えていけたら、すばらしいなあと思います。私はそんな意味で資料の始めの部分に、「遠くのことには美しく生きられる。」という言葉に刻みました。「遠くのことには美しく生きられる。」恵子の母親の言葉です。この言葉に寄せて、みんなの思うことを語っててください。

- C₁：「差別を無くそう」ということは言えても、結局は綺麗事で自分を飾っていくっていうか、差別を無くそうとしているふりをしているから、「遠くのことには美しく生きられる。」とか言っていると思います。
- C₂：「遠くのことには美しく生きられる」って言うことには、同情したりする部分だと思うし、自分のことで無いから「差別してはいけない」とか言っていて、やっぱり部落差別についても多く人は、自分には関わりのないところでしか考えていないから、もし自分が部落の問題にぶつかったとき、どうしても弱くなってしまうんだと思います。
- C₃：人間というのは、自分に関係が無かったら、人に尊敬してもらえるような綺麗な言葉を言うことができると思います。でもいざ自分の問題となってくると差別してしまう弱さが人間

にはあると思います。

- C₄：やっぱり本音と建前があって、頭の中で差別はいけないということがわかっているから、人のことについては多くの人から尊敬されるような言葉を言うようになるけど、なかなか心の底から差別をなくしていくというのは難しいと思います。
- C₅：僕もこの母さんは、人に尊敬してもらうために綺麗な言葉を言ってきただけだったんだと思います。
- C₆：自分に直接関わることは、自分は差別するのを始めからわかっているはずなのに、人のことになったら、関係ないから適当に言うのとったらいいと思っているようなところが私たちにもあると思います。
- C₇：私も以前は「遠くのことには美しく生きられる」みたいな生き方をしていて、学校で発表とかするときには、「差別をなくそう」とか言って発表していたけど、その言葉は差別を真剣に考えたものではなくて、そんな綺麗事ばかり言よったけど、影ではバカ騒ぎしたりして、本当は差別問題には無関心でした。
- C₈：他人のことになると、正しい言葉を使ったらいくらでも言えるけど、いざ自分のことになると、醜さをさらけ出してしまうことって多いと思います。自分ができないことを他人にいう資格はないと思うし、他人のことをとやかく言うのではなくて、自分がその立場になって考えなければこんな言葉は言えないと思います。
- C₉：自分に関係のないことだからそんな言い方になってしまうんだと思います。私自身も自分自身のこととして考えられなくて、他人のこととしての意見だけになってしまいます。自分が差別されないからいいと思って、自分が差別されるのが嫌だから、人を差別するんだと思います。自分は差別しているのに、他人や世間が差別するように思い込んでいるところがあります。
- C₁₀：「自分には関係ない」という気持ちが、そういう「遠くのことには美しく生きられる」ということだと思います。自分が部落の人間でないとあって、部落の人たちに綺麗事をならべて、人の感情を損ねる人間はいっぱいいると思う。僕も人の気持ちを分かってしようとしているけど、人の気持ちを分かるのは難しいと思います。もし、自分がその子の気持ちになれても、気持ちが分かっているようになつたら、差別がなくなっていくと思います。
- C₁₁：自分自身に関係のないことはいくらでも言えるけど、自分に都合の悪いことには関わらんようにしようっていう部分が心の中にあるんだと思います。自分の問題だと思わずに一線を引いて他人事だと思っている部分が心の中にあるんだと思う。だから、遠くのことには美しく生きられるんだと思います。
- C₁₂：自分には関係のないことだったら、綺麗事や何でも言えるけど、自分の身近なものになつたら、自分も差別されるようになると思い込んでいるからだと思います。
- C₁₃：僕も身近に部落差別があるんを知っているのに、自分には関係がないから口ではいくらでも綺麗事が言える。差別をなくしていこうとか、聞いている人を感動させることを言うだけで、いざ結婚とかで自分の身に振り掛かってきたときに逃げ出すようになると思う。
- C₁₄：自分に関係のないことだったら、本当に思っていないことでも口だけなら言えるけど、自分に関わるこういうふうな結婚問題とかだったら、まわりの目を気にしたりして、差別されるのが怖くて、それでどんなことをしてもやめさせようとしたりする。今、私もそんな弱さがあると思うけど、もしそうされたら嫌だから、私だけでなしに自分の家族も私から変えていきたいし、みんなが自分のこととして考えていけるようにしたいです。
- C₁₅：僕は「遠くのことには、美しく生きられる。」って言っても、自分がどうなんかなんかと言われたら、なんとも言えないものがある。だから自分に対しても、自分のこととして考えていく

ことが大切だと思います。

- C₁₆：直接自分に関係のないことには、いろいろと綺麗事をならべられても、自分に関わってくると自分の差別意識が顔を出してくるんだと思います。人間は常に自分を安全なところにおいていく弱さがあると思います。
- T₂：自分を安全なところに置いて「差別はいけません」ということは言える。でも自分にそのことが振り掛かってきたら醜さをさらけ出す、そんな弱さを背負って生きているのが人間だと思う。私たちの中にあるその弱さに気づき、その弱さを洗っていくことが私たちに問われているし、それがこの学習の意味と思うんです。その後、父親が言った「妹の幸せを奪う権利はない」という言葉、みんなの中にどう響きましたか。この言葉が、結婚がつぶれていくノックアウトパンチですよ。結婚差別のほとんどがこの言葉で締め括られています。先生の友人が、かつてこんなことを話してくれたことがありました。
- 《私は中学時代に同和教育を受けてきて、絶対に部落差別はしないと信じていた。でも私は結婚するとき、偶然結婚相手の旧姓が、私の近くにある対象地区に多い苗字だったんです。私の両親は私に言いました。「まさか部落の子ではないだろうな」って……、私は言い返したんです。「部落であるとかないとかで差別するような時代ではないよ」って……。でもその後と言われた両親の言葉で私はその結婚をやめようかと思ったんです。両親はこう言いました。「お前は好きな人と結婚できていいだろう。でもお前にはお前の妹の幸福を奪う権利はないぞ。お前がもし部落の人間と結婚したら、お前とたった一つしか年の違わない妹の見合の話は全くなくなる。」私は情けない話だけど、そのとき思ったんです。「もし部落の人間だったら結婚やめよう」って……。両親は興信所を使って調べました。実は私は妻が部落でないことを確認して結婚したんです。今思うと本当に自分が愚かに見えてきます。差別って何でしょうね。》
- T₃：こんな話を語ってくれた友人がいました。このような話は一つや二つではない。みんなもこのような場面に自分をおく瞬間があるかもわかりません。「妹の幸せを奪う権利はない」と言った両親の思いについて考えてみてください。
- C₁₇：僕が思うのは、この両親がこの言葉で逆に幸せを奪っていると思う。自分の意志で幸せをつくっていくのが本当の幸せだと思う。
- C₁₈：両親は「お前は部落の人と結婚すると不幸になる。」と思っているんだと思います。でも、恵子さんたちの思いは本当に信頼する人と結婚できなければ幸せになれると思っていると思います。もし、私が恵子さんだったら、恵子さんのように思っているけど、そういう言葉が言われたら言い返せんと思います。
- T₄：もし言い返せんとしたら、それはなんで言い返せないんだろうか。そのことも考えていきましょう。
- C₁₉：私は絶対おかしいと思います。部落の人とお姉さんが結婚したら、消えてしまうような見合いの話なんかは、うまく結婚までいっても本当に幸せにはなれないと思います。私は両親は妹のことを考えていたかもしれないけど、自分たちが差別されるのが嫌だったと思います。資料の中にもあるけど、両親の差別意識をなくしていくことが、恵子も妹もその両方を幸せにしていくことになると思います。
- T₅：みんなもその場に自分をおいて考えてみてください。
- C₂₀：私がもしこんなことを親に言われたら、「私が妹の幸せを奪わなあかんの」とか言うと思うけど、この話で姉の幸せを奪っているのは、その両親だと思うし私も結局は、自分たちが差別されたくないから、こんなことを言っていると思います。
- C₂₁：僕はこの場面が一番腹が立ちました。恵子さんがせっかく両親のことを信じて幸司さんの

ことを打ち明けたのに、母が今までずっと綺麗事ばかり言ってきて、恵子さんが騙されたような気がしてものすごく腹が立ちます。僕はこの両親こそ、恵子さんや妹の幸せを奪っていると思います。

C₂₂：両親はなんだかんだ言っても、自分に差別が振り掛かってくるのを恐れているんだと思います。僕は差別されることが絶対不幸とは言い切れないところがあると思います。本当にすばらしい人間は差別されている立場の人が、絶対人間的にすばらしいと思います。それとその後の妹の言葉に感動したし、こんな思いがあれば人間は絶対幸せになれると思いました。

C₂₃：私はみんなの意見とは少し違って、両親は二人のことも考えていたんだと思います。恵子も絶対苦勞すると思っていただろうし、おまけに妹まで不幸になったら、親としてはすごくつらいことだと思います。でもこれは悲しいことだけど、本当のことだと思います。私の周りにも同じようなケースで結婚が駄目になった人もいるみたいだし、いろいろな苦勞もあると聞かされたことがあります。近くでそんなことがあると聞くとやっぱりつらいです。生々しいものがあって現実はこのなかだと思います。

C₂₄：私は今のAさんの発言についてですけど、Aさんは差別のことを勉強してわかっていると思うけど、Aさんのような意識が、わざわざ苦勞する人と結婚しなくてもいいという意識になって、差別を残してきたんだと思います。この両親のように私たちの中にも、差別されることを怖れる意識があるのだから、もつともつこんな差別にこだわったり恐れたりする生き方ではなくて、恵子さんのように差別に向き合うことができたら本当に幸せになれると思います。

C₂₅：私もこの両親のような意識をほとんどの人が持っていると思います。だから差別はなくならないと思うし、差別は残されていると思います。私たちがこの学習をしているのはこんな意識を洗っていくためだと思います。

C₂₆：私は部落の人と関わったことでつぶれていくような見合いや結婚なんてしたくない。それが本当の気持ちです。そんな気持ちになってきたのは、みんなと学習してきたからだと思います。

T₀：実は私の思いもそうですよ。差別に負けた見合いや結婚をみんなにもしてほしくない。家と家の格とか、親の財産とかで決まるような結婚をみんなはしたいか。私は思う。人間の本当の幸せというのは、こんな愚かな差別から解放されることだと思う。部落差別を怖れたり、人を差別する意識を持たない人生というのは本当に豊かな本当に幸せな人生ですよ。私はこの学習の最も強く私たちに訴えている部分というのは、その立場に立てるということ、部落の人間になれるということだと思うんです。そして、部落の人間として誇りが持てるということだと思うんです。部落にこだわらない。そんなことに怖れない。差別にこだわるのがいかに愚かであるかっていうことをきっちり訴えていくことができ、自分に誇りが持てる。そんな生き方を貫いてほしいと思うんです。みんなの思いをつないでください。

C₂₇：私は自分の差別意識をごまかして差別していることが、この差別を残している大きな原因だと思います。人のことや世間のことをとやかく言うまえに自分に何ができるかということを考えていかなければ、私たちは本当に幸せにはなれないと思います。

T₇：この問題はみんな自身の闘いですよ。もうみんなは卒業します。中学校でやった同和問題学習が、本物であったのか綺麗事であったかが問われていきます。どうか流されていくような生き方だけは絶対にしてほしくない。流された仲間の涙、その涙に同情しただけだったのか。みんなと営まれてきたこの同和問題学習の営み、それは同情しただけだった同和問題学習であってほしくない。その立場に立って生きるということ。みんな自身の生き方にしていこう。仲間の思いにみんなの本当の思いを返していくということは、しっかりと差別をなく

していく生き方をするっていうことです。この教室でもみんなは涙を流してきた。その涙を熱い熱い人間を解放していく涙に変えていくために、この時間、この最後の同和問題学習をみんなにとってかけがえのない時間にしてほしい。

C₂₈：この板野中学校でやった同和問題学習は、私の心の本当に思うとったことが言えたんだなって、今思っています。高校に行っても一人になっても、私の思いを発表することができるようになったと思います。この中学校でしたこの学習は、絶対口先だけのことではないと思います。高校に行っても一人になっても綺麗ことを言うんでなくて自分の思っていることを言って、中学校で同和問題学習してなかった子にも、この思いを分かってもらえたらと思います。

T₈：Tさんにどうつながりますか。

C₂₉：この作品の中で、この幸司さんが自分自身が部落であることを言ってなかったときがあったと思うけど、恵子さんになかなか言い出せなかった気持ちというのは、本当によくわかるし、やっぱり苦しいものだと思うけど、私はみんなとこの学習に取り組んでいく中で、私自身の心の中では、部落に生まれたことを恥ずかしがる気持ちが無くなってきたし、先生やみんなと頑張ってきたことをこれからの生きていく支えにしていって、幸司さんが恵子さんにその気持ちを語ったように、私も私の気持ちを語っていきます。私は徳島商業へ行こうとしているけど、今徳島商業で頑張っているA先輩たちのように私は高校でもこの1年間頑張ってきた気持ちを絶対に忘れることのないようにしたいし、今年は板野中学校からも徳島商業へ行く仲間が多くいるので、その仲間と今の思いを大切にしながら頑張っていきたいと思います。それと私は先生がつくってくれたこの『峠』という作品が、今まで学習したどの資料より好きです。先生が文部省で訴えたかった思いを私は大切に頑張ります。

T₉：人は変わるんです。そして変われるのが人間です。そんなことを思いながら、私はこの資料を書き、文部省の会議に参加してきました。まだまだ差別が存在する社会、その現実をしっかり見据えて頑張っていくことができる生き方をみんなで見つけたのがこの1年間でした。差別意識の塊だった人間が変わっていくんです。それが同和教育です。それがみんなのしている全体学習です。恵子の両親は変わったでしょう。本当に変わったでしょう。この作品は事実であり、真実であるんです。先生自身の結婚がそうだった。私は妻の両親を今、心の底から尊敬し信頼しています。身体を張って私たちを守り、差別と向き合っている両親が私の前にある。私は結婚するとき、披露宴はしなくてもいいと思った頃がありました。そのとき私の大切な友人が励ましてくれました。「部落差別をなくしていく生き方を貫いているお前が、こそ結婚してどうする。」この言葉が大きな勇気をくれました。この勇気が多くの人を変えていく力になっていきます。私は多くの仲間の支えの中でささやかですが、お世話になった人たち、大切な仲間が集まってもらって披露宴を実施しました。私は人は変わるということ、変われるということをみんなに訴えたかった。みんなは何がこの両親を変えていったと思いますか。

C₃₀：僕は幸司と恵子の二人の愛と頑張りがだと思います。僕も先生が言うように人には人を変えていく力があると思います。この二人の強い意志があったから両親の気持ちは変わっていったと思います。

C₃₁：差別というものの愚かさというものに気付いたからだだと思います。本当のことを知ったことにより両親の中にも差別と闘う勇気が生まれてきたと思います。

C₃₂：あの両親を変えたものはあの二人の粘り強さであり、両親が感情的になっても決して感情で対抗しなかった二人の落ち着きだと思います。人がいろんなことに納得していくのは、お互いの考えを冷静に語り合うような状況が必要なんだと思います。頭ごなしではなかなか変わっていかないと思います。

- C₃₃：私もやっぱり恵子と幸司の本当に信頼し合い、助け合い、幸せになろうとする気持ちが、両親を大きく揺さぶったんだと思います。
- C₃₄：私は幸司さんが部落に生まれたことを卑屈に思わず堂々として、差別と闘っていく姿に両親の価値観が大きく変えられていったんだと思います。資料の中にもあるけど、今まで両親の持っていた部落の人に対するイメージと幸司さんの姿は全く違っただろうし、その姿に両親はこの人ならという気持ちになったと思います。
- C₃₅：私も幸司さんの生き方が両親を変えていったと思います。今まで部落の人はかわいそうと同情していただけだったのが、幸司さんの話からそのことが差別だということに気づいたと思うし、幸司さんとなら共に頑張れるという気持ちになったと思います。
- C₃₆：私も幸司さんと恵子さんの一生懸命さだと思います。幸司さんや恵子さんがうわべだけで話をしていたらわかってももらえなかったと思います。幸司さんが自分の本当の思いを訴え続けたからこそ、わかっていったんだと思います。私も差別のことを考えられるようになったのは、クラスみんなの苦しい思いや先生の本当の思いを聞いて考えてきたから、差別のことを自分の問題として考えられるようになってきたと思います。人は人の本音を聞いてそれに応えていくことで変わっていけると思います。
- C₃₇：両親を変えたのはやっぱり幸司と恵子の気持ちだと思います。娘が部落の人と結婚することが恥ずかしいのではなくて、自分がそんな意識でいたことが恥ずかしいとわかったんだと思います。
- C₃₈：やっぱりあきらめずに頑張っていた幸司と恵子の思いだと思います。それにどんなことを言っても、実の親なんだから娘に本当の幸せを願っていたと思います。だから娘が幸司さんについて行くと決めて、それが自分の本当の幸せなんだと思っているのがわかり、世間にこだわっていた自分と、差別への怒りがこみ上げてきたんだと思います。そして、差別を乗り越えることが本当の幸せになっていくとわかってきて、その第一歩が娘の結婚を認めることだと気づいたんだと思います。
- C₃₉：私は二人の絆が両親を変えたのだと思います。恵子の両親は幸司と恵子の本心を聞いて、部落差別の間違いに気づいたと思います。それと同時に自分自身の差別意識や世間に惑わされていた自分に気づいたと思います。この両親は二人に生きることや愛すること、人間として美しく生きることを学んだと思います。だから二人の結婚に反対する理由がないことに気づいたと思います。
- C₄₀：私も恵子と幸司が自分の中で思っていることをぶつけていったからだと思います。感情的になっていたら、そのときは両親を圧倒することができても、その場が過ぎると冷めていったと思います。その思いをわかろうとしながら思いを語っていくことがとても大切だと思います。そんな働きかけをしたことによって、両親も幸司が来るたびに耳を傾け、自分の中で考えていたと思います。
- C₄₁：二人の熱い思いみたいなものが両親を変えたのだと思います。さっき、先生が言っていたように、人間には人の心を変える力があると思います。国語の本にも同じようなことを書いてあったし、このことだって同じだと思います。人を変えることができると信じることとか、絶対私たちの気持ちが分かってくると信じて根気強く語っていくことが人を変えていくと思います。それとみんながそう思えるようになったら、差別は絶対になくなると思います。
- T₁₀：自分自身が変わってきたことと重ねて、変わろうとしている自分と重ねて自分を語ってください。
- C₄₂：私はこの中学校に入って3年生になって、泣きながら自分の意見を言っている子を見て、その時、初めて私の周りにもこんなに差別があるんやなあって……、差別で悲しいつらい

思いをしている子がいるんだなあって思いました。そのとき差別の現実を見たっていうか、その子を見たから自分も頑張らなあかんと思ったし、その子自身も変わっていかないかんと思いました。

C₄₃：両親を変えたのは恵子さんと幸司さんの気持ちで、それは本当に差別を無くすために、二人で闘っていくっていうことを両親に分かってもらいたかったから、二人の本当の気持ちを言って分かってもらえたんだと思います。私が恵子さんの立場だったら、結婚できるように両親に言うと思うけど、反対に親の立場だったら娘の幸せのために反対すると思います。それが間違っていることに気づけないで、みんなが差別するから差別をされる。差別するのが普通っていうか、娘の結婚に対して娘の幸せを思って反対することが、親のすることだと思っているのだと思います。

T₁₁：どうして、そういう意識になってしまうのかということが大事なんです。頭の中で差別はいけないっていうことは、みんなわかっていますよ。それなのに差別している。どうしてそうなるのか。私たちの中にあるそんな意識、その差別意識を洗うのが、この学習の意味だと思う。この1年みんなと取り組んできた学習が本物であったかどうか問われるのはここにあると思う。みんなの思いをつないでみてください。

C₄₄：両親を変えたのは、幸司さんと恵子さんの気持ちが本当に両親に通じたからだと思うし、それと先生の話聞いてると、先生も結婚するまでにいろんなことがあったみたいだけど、先生の怒りや、それを乗り越えてきた思いが伝わってくるし、それに先生の奥さんが「私を部落の人間と知らないで、部落についていろいろな人がいる」って言ったことを聞いた時に、本当に先生はうれしかったんだろうと思うし、何かよく分からんけど、私も先生の奥さんの話を聞くとうれしくなるし、それで今思うことなんだけど、今までの私は自分から変わっていった私でなくて、みんなやいろんな先生に変えられた私だから、これからも高校入っても先輩とか高校の先生とかに変えられていかなければなかなか頑張れないところがあるかもしれない。私は変えられていく私から変わっていく私になりたいと思います。それが先生と出会えた本当の喜びになっていくと思うし、私がこれから大きな峠を越えていくことにつながっていくと思います。

T₁₂：私は思うんです。変わるのが人間だと……。みんなは将来いろんな人と出会うでしょう。様々な思いを持った人、様々な生き方をされている人、多くの人たちとの出会いの中で、この板野中学校で営まれた人間が人間として生きを求める学習、この学習の中でみんなに灯されたものを多くの人に灯していく生き方を貫いてほしいと思います。この恵子や幸司のように……。

T₁₃：作品の最後のところ、恵子や幸司の生き方によって変わっていった父親の言葉が記されています。みんなはこの言葉をどうとらえましたか。「部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち二人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物のかついで生きていこうと話し合ったんです。」私の中に震えるような感動がわきおこった言葉です。みんなはどのような思いでこの言葉を受け止めたでしょうか。「共に荷物のかついで生きていく」ということについてみんなが思うことを語り合いたいと思います。

C₄₅：差別はみんなではなくしていくことが一番問われていると思います。多くの人が共に頑張っていくことが最も大切なことだと思います。僕は板野中学校に転校してくるまでは、同和問題をこれほど真剣に考えたことはありませんでした。僕はみんなと出会って自分自身を変えていくことができたと思います。みんなと共に荷物のかついでいく生き方がしたいと思いません。

- C₄₆：差別を他人事と考えていくんじゃなくて、自分のこととして考えていくことだと思います。口先だけで差別はいけないというのは誰でも言えるけど、差別をなくそうとする気持ちを行動に移すことが大切だと思います。部落差別をする方からなくす方へ変わることが、共に荷物がかついで生きていくことだと思います。
- C₄₇：私はこれから恵子がかついでいくことになる差別を、自分たちもかついで頑張っていこうと決心したんだと思います。それと差別をなくすことが差別されている人だけではなくて、差別している人も幸せにしていくことに気づいたんだと思います。
- C₄₈：私はやっぱり恵子や幸司と共に部落差別と闘っていくことだと思うし、自分自身の差別意識とも闘っていくことだと思います。また、世間体に振り回されている社会と闘っていくことだと思います。この生き方は招待状の中にある「美しさを求めて生きる」生き方だと思います。
- C₄₉：僕はただ単に負担を共有するというのではなくて、今まで心の中では違うラインというか、全く違う価値観で生きていたのが、心の底から同じラインで、同じ目的を持って生きていこうとする気持ちをこう表現したんだと思います。
- C₅₀：人は自分は荷物は持ちたくないから、他の人に荷物を持たせて、自分は無関心でいようとするものだと思います。差別でいうと自分は受けたくないから、他の人を差別していくんだと思います。このお父さんは差別の本質に気づいて、本当に変わったんだと思います。
- C₅₁：私にはまだまだ部落が重いです。これは部落の人のほとんどの思いだと思います。その重さは部落に生まれなければわからないと思ってきました。今もその気持ちはあります。でもこのお父さんはその重荷や苦しみをしっかり背負っていかうとしているんだと思いました。この言葉を読んだとき、私の心の中に今まで経験したことのない思いが広がりました。
- T₁₄：Sさんの心の中に広がった思いって何だろうか。
- C₅₂：これから頑張っていけるという勇気のようなものです。
- C₅₃：私も、部落という言葉を知りただけでぐっと心が重くなる人たちの思いに寄り添って生きていくことだと思います。私は「その重い荷物の中に自分たちが入っていたことに気づいた」という言葉が大好きです。みんながこの思いになれたとき、部落差別は完全になくなると思います。
- T₁₅：本当にみんなはすごいですよ。でも悲しいかなみんなが生きていくこれからの社会にはまだまだ差別がある。頭ではみんな差別はいけないということはわかっているのに、現実に差別している人がいっぱいいる。口先だけでいいこと言うても、自分のことになるとそうはいかない。人間は自分に関わらないところではいくらでも美しい言葉を吐くことができる。でも自分に関わってくると醜さをさらけ出してしまう。そんな弱さを持っている。この学習の中で最も大切な部分は、自分にとって差別をなくすことが本当の喜びになっているかどうかということなんです。部落に生まれた人、部落に生まれなかった人、それぞれの状況は違っても、差別の本質をしっかりと見つめることができ、差別があることによって部落に生まれなかった私もこんなに苦しんでいるんだということに気づき、共に差別をなくそうとする生き方ができるかどうか。そのことが大きく皆さんに問われていきます。みんな自身が部落差別を始めとする様々な差別をなくしていくことが、私にとって人間として生きていく大きな喜びなんだと実感していくことができる。そんな学習になっていかなければ今までやってきたことはすべて綺麗事では終わってしまうと思います。みんなとやってきた同和問題学習、最後の発問です。差別をなくすということはみんなにとってどんな意味があるのだろうか。みんな自身の生き方、みんな自身の生活に関わって考えてみてください。
- C₅₄：差別をなくすということは自分自身のきたない心を洗うことであって、自分が幸せに生き

ていくためだと思います。

- C₅₅：僕も差別をなくすということは、僕自身の中にある差別意識を洗っていくことだと思います。僕はこの1年で差別に対する見方が変わってきたし、お母さんやお父さん、おじいさんやおばあさんの気持ちも自分なりに理解できるようになったと思います。この学習は僕が人間らしくなっていくための学習だと思うし、差別をなくすということは僕の心を綺麗にしていくことにつながっていると思います。
- C₅₆：これはすべての人に言えることだと思うけど、世間を気にして生きていくということは、本当にしんどいものだと思います。私は高校を選ぶときも世間体を気にしました。私にしても私の両親にしても、世間体を気にしていく底には差別があると思います。差別がなくなるということは、私たちが自由に安心して生きられる社会にしていくことにつながると思います。私は私を世間体にこだわって縛っていくことがないように差別をなくしていきたいと思っています。
- C₅₇：私は1学期の同和問題学習の時間、識字のことを話し合ったとき、私は私のおばあちゃんに字が書けないことから、おばあちゃんは部落の人だと思い込んでしまって泣いてしまいました。みんなの前であれだけ泣いてしまったのは、私の中に部落の人を差別する意識があったからでした。私の中にある差別意識が私を苦しめていました。部落問題は部落の人だけでなく、多くの人を苦しめている現実がいっぱいあると思います。私は私の差別意識をなくして行って、あんな情けない涙を流さなくても生きていける人間になっていきたいと思っています。私にとってこの学習は、本当の人間になっていく学習だと思います。
- C₅₈：差別をなくそうという言葉で呼び掛けたり伝えたりするのは誰でもできると思うし、死ぬまで何回も言えると思います。心がない言葉ならためらいもなく何度でも言えるだろうけど、行動に移して自分自身が歩かなければ何も始まらないと思います。私はこの資料を絶対に忘れません。
- C₅₉：私の心の中には、部落に生まれなくてよかったという心があって、心の中には今も差別意識が残っています。でも3年生になってみんなとこの学習をしていく中から、この差別意識は段々と小さなものになっていきました。部落差別をなくすということは、私の中にある差別意識をなくしていくことだと思います。
- C₆₀：私もみんなとこの学習を深めていく中から、差別がなくなったら自分が一番幸せになれるのではないかなと思うようになりました。差別意識は差別される人に対して絶対許されないことだけど、自分自身が一番苦しめているように思います。私はこの差別意識がなくなったときに、自分自身が一番輝くときだと思います。そして差別と闘っている自分に自信がもてるようになって、友達とも本物の絆で結ばれると思います。
- C₆₁：私は板野中学校に入学してこの3年間、この学習をしてきて私の人を見る価値観は大きく変わったと思います。私は差別をなくすということは、自分にとって人間らしい生き方を始める一歩だと思います。自分らしく一生懸命に生きることだと思います。私にとって差別をなくすことの意味とは、私が人間として多くの人を幸せにしながら自分も幸せになっていく生き方をつかむことだと思うし、私自身が本当の生き方をつかむことだと思います。私は世間に流されない生き方をしていきます。
- T₁₀：部落差別をなくすことは自分のためだという意識をみんなが持てない限り、この差別はなかなかなくなっていくかと思っています。これはみんなへの究極の問いかけです。どうですか。
- C₆₂：これから生きていく中で差別に出会ったら自分もつらいと思うし、差別するのも今はごつち恥ずかしいことだと思うようになってきました。やっぱり差別は自分のためになくして

いくんだと思います。

T₁₇：そんな生き方をつかんでいくのが人間として生きることだと思うんです。みんなに本当に言いたいことなんです。N君はどうですか。N君のために部落差別をなくすって言えるか。部落差別をなくすっていうことは、N君の幸せのためになるんだと言えますか。これはみんなの幸せになるんです。Tさんの幸せになるんです。Mさんの幸せになるんです。K君の幸せになるんです。そう心の底から言える自分にならなければ、みんなは必ず息切れしますよ。これは差別をなくしていく真実です。部落差別がなくなることによって、部落に生まれた私も、部落に生まれなかった私も、その両方が幸せになれる。逆に部落差別があることによって部落でない人たちまでが、より低位な状態により厳しい状態におかれている現実があります。現実には結婚差別で苦しんでいるのは部落の人だけだろうか。どうですか。以前A先生がこんな話をしてくれました。A先生の近所の人のことなんですけど、部落でない人が、部落差別のために農薬を飲んで死んだということです。人を好きになるっていうのは、自然なことだと思う。結婚というのは、家の大きさや親の職業で決まるものではない。そのことは誰でも頭の中でわかっているはずですが、しかし、そういう情けない現実がある。そんな社会をみんなが安心して生きられる。どんな状態になっても、どんな状況におかれても安心して生きられる。そういう社会にしていくためにみんなで頑張っていきたいと思うんです。

T₁₈：人間はどんな状態になっても、どんな状況になっても幸せに生きられる権利がある。幸せに生きられる権利がある。今幸いに豊かな家に育った。お父さんもお母さんもおいでる。なんかの拍子でお父さんがおいでんようになる。お母さんがおいでんようになる。たった一人になってもみんなが幸せに生きられる。そんな社会でありたいと思う。みんなが将来子どもを産むだろう。家庭を築くだろう。その子が健康に生まれることは約束されてない。どんな状況に人間がおれていくかわからない。どんな状況におかれても、弱い立場の人間を排除する社会であってはならない。部落差別を無くすっていうことは、誰もがどんな状況にあっても、人間が人間として大切にされる社会、私が私として大切にされる社会、その子が一つの個人として、人間として大切にされる社会、そういう社会をつくっていく。私が幸せに生きていくために、私たちが幸せに生きていくために、そういう視点があるんです。人のためにというのは、非常に美しく聞こえます。でも、それは本物ではない。S君の幸せのために、どういう立場になっても、どういう状況になっても、幸せに生きるために、私が幸せに生きるために、Tさんと幸せに生きるために、Y君と幸せに生きるために頑張ります。

T₁₉：もう一つ言うけど高校進学の問題も、底にあるのは部落差別と重なるでしょう。あの学校にいけなんだろうし、世間体がつて言う親や親戚の人たちが存在する。みんながその学校にいつて何がしたいかよりも、近所がどう言よるか、親戚がどう言よるか、そういう世間体の中で揺れてきたでしょう。差別意識と一緒に。そういう差別がない社会っていうのは安心してみんなが生きられるし、ほんまに幸せに生きられる。そういう社会にしていく、みんなは差別のない安心して生きられる社会をつくっていく主体者として生きてほしい。頑張つてほしい。差別を無くすっていうことは、みんなが、みんなの家族が、みんなの周りの人が、みんなの仲間が幸せに生きていくっていうことにつながっていく。人が生きるっていうことは誰かを幸せにすることです。それが自分を幸せにしていくことにつながっていく。どうか本当の自分というものをもって、主体的に今の生活を頑張ります。今、前に書いてあるけど、高校全入をみんなで目指しているです。全員が高校を受験するようになってます。みんなの進路は、もう決まっている人が何人かいますけど、最終の決定は3月18日の合格発表の日です。みんなが笑顔で集まろう。とにかく全力で頑張ります。終わります。